

大人の恋は図書館でみつける



色とりどりで、オシャレで可愛くて、遠慮も譲り合いもない売り場は、まるで怒号が飛び交う満員電車のような……。チョコレートの祭典、バレンタインデーが終わりました。最近では女性ばかりではなく、「自分用チョコ」を求めに来ている男性の姿もチラホラ見かけます。



でも、「イベントに乗っかって浮き浮きしているのは一部の人だけ。バレンタインなんて関係ない!」と思っている人もいるのでは? 一年に一度しかないイベントなら、一緒に楽しんだもの勝ちだと私なんかは思っていますが、恋愛にうつつを抜かしている場合ではない人や、今はとてもそんな気分になれない…という人もいます。そんな時は、他人の恋愛をのぞき見て、心に恋の隙間を作ってみませんか?

マンガでも小説でも映画でも、およそマスメディアで拡散されるものは恋愛をテーマにした事柄が多いですね。「転校した幼馴染と再会したらカッコよくなっていてドキドキ」とか、「大好きな人は、親友の彼氏」とか、有りがちでかわいらしい、ある意味王道な恋愛が読みたい人は少女マンガを読んでください。一筋縄ではいかなくて、素直になることも妥協することも、打算とプライドを簡単に捨てることもできない、そんなオトナの恋愛をのぞき見るなら、お薦めは江国香織の小説です。長編はもちろん短編集も。江国香織が描く恋愛小説に出てくる女性たちは、固定観念に囚われていません。そしていつでも「自分」を客観的にみえています。愛している旦那がいるのに他の男と付き合っている自分も、旅先で出会った相手と一夜限りの関係を持つ自分も、恋人ではない(もちろん旦那でもない)男の子どもを産む自分ですら。生々しく泥沼化してしまいそうな関係性の男女でも、江国香織が書くところどころ達観したような、ヒンヤリとした空気を纏わりつかせています。「自分らしく生きてきた結果が、今の人生なのだ」と、ある種諦念のようなものを感じさせます。シチュエーションだけ聞いていると「ありえない!」と思うのに、読み終わってみれば「こういうこともありかも」と思ってしまう、そんな不思議な説得力があるのです。普段、小説なんて全く読まないという人にもおすすめしたい作家です。

私はこの「ずいひつ」の紙面で自分の好きな作家や小説の紹介をしています。この「好きな本を紹介する」という行為が、今ブームになっているのをご存じでしょうか? 1人5分の持ち時間で好きな本についてプレゼンし、そのプレゼンを聞いたオーディエンスに「読みたい」と思ってもらえるかどうかでバトルする、その名も「ビブリオバトル」が全国各地で開催されています。昨年の12月には、各地の予選会を勝ち抜いた30名による、全国大学ビブリオバトルが京都で行われました。(ちなみにグランドチャンプ本はロビン・スローン著『ペナンブラ氏の24時間書店』)

そして実は、愛知県図書館で開催された「第1回ビブリオバトル」(2013.4.27)では、当館の事務長が優勝しています。詳細はこちら↓をご覧ください。

http://websv.aichi-pref-library.jp/biblio/biblioreporth25_1.htm

「人を通して本を知る、本を通して人を知る」ビブリオバトルのスローガンは、体験することで実感できます。少しでも興味のある方は、是非一度、体験してみてください。

江国香織著・楠元所蔵図書

